

宮沢中村遺跡

一般国道52号（甲西道路）改築工事
中部横断自動車道建設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1995. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局

序

本書は日本道路公団の行う中部横断自動車道建設工事にともなう宮沢中村遺跡の発掘調査概報であります。この工事は建設省が行なっている一般国道52号改築工事と重なるものであり、昨年度までは国道工事にともなって調査を実施してきたところであります。この事業にかかわって当センターではこれまでに10箇所の遺跡を調査してきました。この宮沢中村遺跡は路線上最も南側に位置する遺跡であります。この地区にはかつて旧宮沢集落が栄えていましたが、度重なる水害のため明治年間に現在の地に移転したとのことであります。このことから明治以前、特に江戸時代を中心とした集落跡が埋没していると考えられていましたが、調査の結果江戸後期の民家や寺の跡が保存状態も良く発掘されました。陶磁器、古銭、木製品など出土遺物も多く、江戸時代の庶民の暮らしを理解する上での貴重な資料が提供されたことになります。

さらに江戸時代の層の下からは中世の護岸が発見されました。ここからは全国的にも希な、網代を用いた杭列が確認されております。堀や建物の壁に用いられた網代については中世絵巻物によく描かれておりますが、現物として出土した例は昨年調査した大師東丹保遺跡の網代垣を含めても極めて珍しいものであります。今保存処理中でありますが、今後の研究に役立つものと期待しております。その下層からは水田跡も確認されており、この地域が洪水で悩まされながらも、古くから生産の場や集落として発展してきたことがわかります。今回の調査成果が広く活用されることを願い、ここに概要を記す次第であります。

末筆ながら調査にあたってご指導・ご協力を賜った関係機関各位、並びに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1995年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

目次

1. 調査の経過
2. 遺跡の沿革と環境
3. 発見された遺構と遺物

例言

1. 本書は、1994（平成6）年度に実施した山梨県中巨摩郡甲西町宮沢字東宮沢に所在する宮沢中村遺跡の発掘調査概報である。遺跡名は調査区が旧宮沢村の中村地区にあたることに基づく。
2. 調査は一般国道52号改築工事および中部横断自動車道建設工事に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が日本道路公団より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本書の執筆編集は新津 健、田口明子が行なった。
4. 人骨鑑定については獨協医科大学助教授茂原信生氏に、昆虫の分析については愛知県立明和高校教諭森勇一氏に依頼した。
5. 本書にかかる出土品・図面・写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

1. 調査の経過

中部横断自動車道の建設は甲府盆地西部においては建設省の実施する国道52号改築（甲西バイパス）工事と重なっている。このため山梨県教育委員会では、平成元年度から5年度までは建設省甲府工事事務所と協議・契約のもと発掘調査を実施してきたが、今年度からは日本道路公団とも協議・委託を行ない事業を遂行することになった。

本遺跡は平成3年度の試掘調査により江戸時代後期を中心とした集落跡とみられており、道路幅25~35m、長さ約120mの範囲を調査対象とした。試掘時から出水が激しかったことから網矢板で調査区を囲み、排水施設を設けながら本調査を行なった。その結果、洪水による砂疊層をはさみながらも明治から中世まで6面を数える生活面が確認された。調査は年度初めから平成7年1月20日まで実施し、同年3月まで整理作業を行なった。

2. 遺跡の沿革と環境（1図）

本遺跡の標高は244mであり、甲府盆地でも低い地域に該当する（1）。巨摩山地から流れる滝沢川や坪川にはさまれた地域で、富士川合流点にも近く水害記録が多い地域である。かつては宮沢集落として栄えていたが、洪水を避けるため明治32年から42年までに全村が移転したという記録が残っている（甲西町誌）。移転後の土地は田や畠として利用されていたが、地元で古屋敷と呼ぶ場所は一段高くなつており民家跡とのことである。調査区内にはこのような高まりとともに、大正末期まで存在していたという法淨寺の跡も残されている。この寺域や各施設の確認を含め、江戸後期の村の調査という点で成果が期待された。

本遺跡の周辺には、大師東丹保遺跡（2）、清水遺跡（7）、住吉遺跡（8）など弥生時代から中世にかけての遺跡が多い。山寄りには縄文時代の鉄物師屋遺跡（9）、住村古墳（10）がある。また甲西バイパス関係では中川田（3）、油田（4）、向河原（5）などの遺跡が調査されている。



1. 周辺の遺跡



2. 発掘区の位置

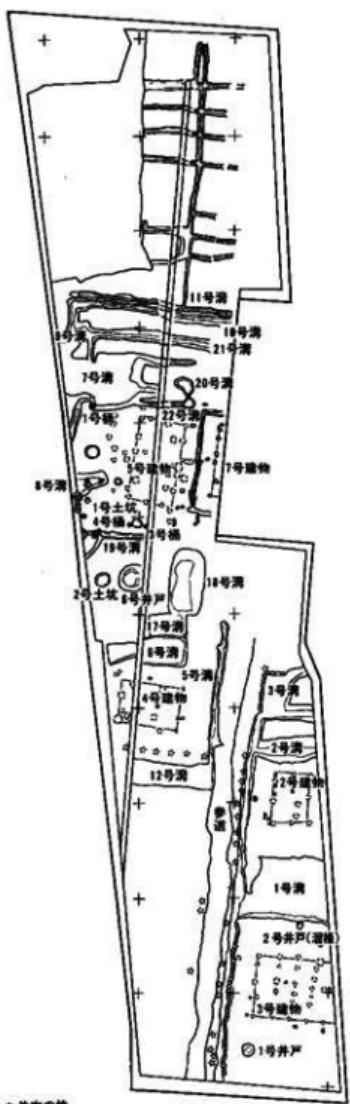
3. 発見された遺構と遺物

【確認された生活面と時代】 明治時代から古代ないし中世までの生活面が6面確認された。まず表土を剥ぐとすぐに明治時代の民家の基礎が表れた（1号建物）。この層を第一面としたがこの拡がりは発掘区の南東隅の一部に限られており、そう広い範囲には残っていなかった。第一面下約80cmほどで江戸末の建物の礎石が発見された。これが第二面であり、遺跡全体に良好に残っており寺跡と民家跡からなる村の様子が明らかになった。この寺の境内には砂利敷きの堅い地面が拡がっているが、さらにその下には池や溝跡などが埋まっていた。ここから18世紀頃の陶器が出土したことから、第二面で確認された寺は江戸中期にもあったことが分かり、これを第三面とした。この面は本堂の西から北にかけて位置している車轍とみられる建物跡や池・水路部分にまで拡がっている。さらに第二面下80cmから柱根の残った柱穴群や土坑が発見された。17世紀代の陶器が出土していることから、これら建物群は江戸初期のものと考えられ、この面を第四面とした。この建物群は発掘区の南東隅で確認されただけである。

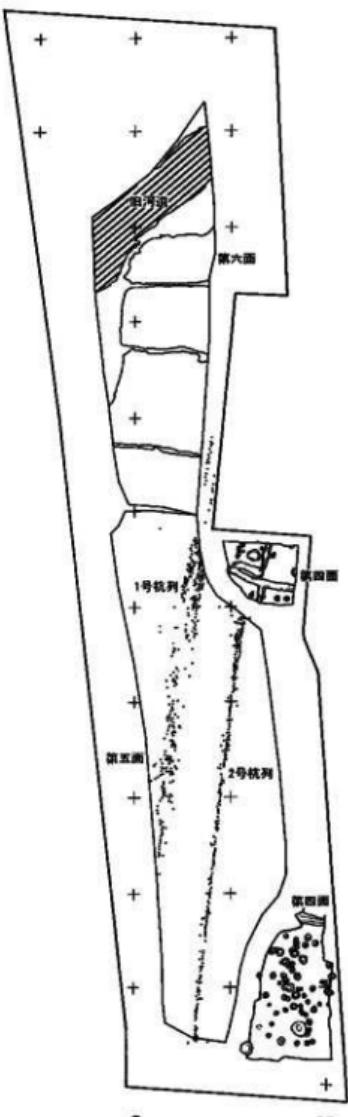
この第四面以下には砂利が厚く堆積しており、相当激しい洪水が何度も襲ったことが窺われる。この砂利層の間に薄いながらも粘土層が残り、この面と相前後して2条の杭列が発見された。これを第五面としたがここは第二面から約2m下（第四面からは1.2m下）にあたり、第四面との関係や出土遺物から中世の面と考えている。さらに80cm程下からは水田跡とみられる畦畔が確認された。これを第六面とした。ここまで現地地表から4m近くを測り、出水やシートバイルの規格といった点からこれ以上掘り下げることができなかった。



全景（南上空より第二面を望む）



1. 第二·三面全体圖

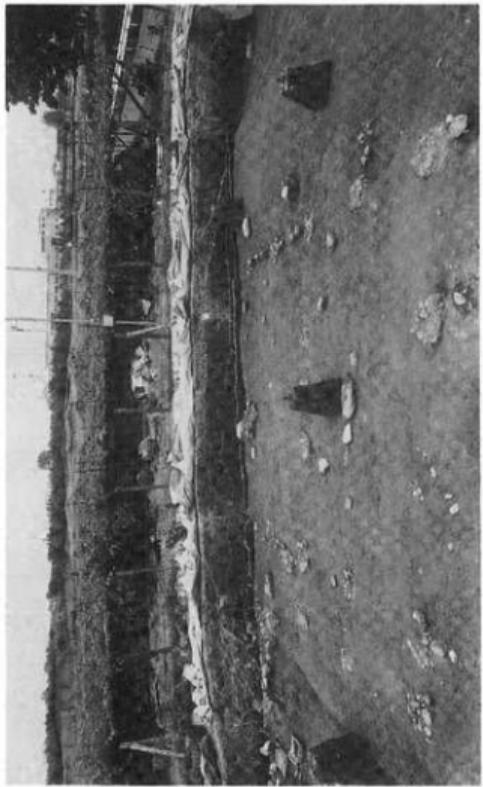


2. 第四・五・六面全体圖



第二面の調査（江戸後期の参道・池・建物跡など）

〔第二面の調査〕 江戸末の民家および寺跡が発見された。建物跡は規則的に並んだ礎石や礎石下の根石から確認された。民家跡（3号建物）は梁行3間半、桁行4間（さらに調査区外に延びる）が調査されたが、桁行7間・梁行3間半の建物であった可能性が高い。というのも、明治年間にこの地から移転されたという建物が昭和47年に解体された時、「文久元年」銘棟札が発見されたこと、この建物の間取りが7間×3間半であったことなど重要な点が、この敷地のかつての所有者井上栄一氏により指摘されている（『甲西町誌』および井上氏ご教示）からである。これからすると、第二面の年代は「文久元年」を含む江戸末として出土陶磁器の年代とも矛盾せず、「文久元年」建築の建物がその後盛土によりかさ上げされ、さらに明治30年代に現在の宮沢集落に移転されたことが考えられる。その盛土や移転が洪水を避けるために行なわれたことは明らかである。調査ではこの民家跡の表に井戸（1号井戸）、裏に溜（2号井戸とした）が、それぞれ桶を用いた状態で発見された。特に1号井戸からは廃棄祭祀の竹もみられた。寺に関する施設には、本堂（7号建物、6間×4間の一部を調査）、七面堂（4号建物）・庫裏とみられる建物跡（5号建物）・参道・池・水路などが発見された。参道の両側には並木の株が並び、前庭に入ると石敷きされている。民家との境界には水路が走り、石垣が積まれている。石垣の桐木には建物廃材が使われている。墓域の一部にも当たっており、埋葬人骨6体が確認された。箱形棺や丸桶が用いられ、数珠や「寛永通宝」の副葬された個体もある。第二面からの出土品は、陶磁器では染付の碗・皿を中心とした日常用品、仏具、照明具などがある。木製品では漆塗り椀、下駄、傘の一部、桶、曲物、箱物、など多彩である。水が多いことからウメ・ウリ類を始めとした種子類やガムシ・コブマルエンマコガネ・ドウガネブイブイ等の甲殻類昆虫も目立つ。金属類では寛永通宝・かんざし・煙管・金具類がある。他に土製玩具もあり、全体として江戸時代庶民の日常生活の匂いあふれるものが多い。



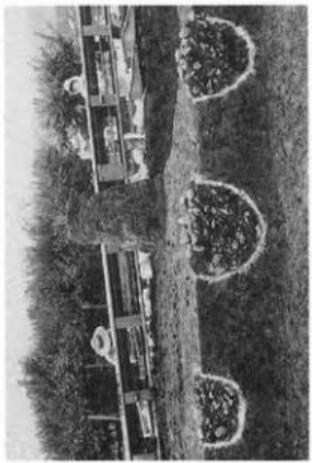
1. 民家の跡（3号建物、礫石や根石が並ぶ）



2. 磋石の根石



4. 陶磁器の出土



3. 根石の断面



5. 小型兩耳盞



1. 石垣と胴木



2. 桶（2号井戸）

【石垣】 池や水路の側面には石垣が積まれている。境内の池では布積み風の野面積み石垣が見られたが、参道と民家とを隔てる水路の民家側（東壁）は谷落し積みの石垣であった（P 7 の写真3）。この石垣は胴木の上にのっているが、これは建物の建築材を再利用したものである。胴木はさらに杭で止められている（写真1）。

【本堂と参道】 本堂は大正年間に移転されたと伝えられている。現在の法淨寺本堂は桁行6間、梁行4間の建物であり、発掘では礎石の並びから梁行4間が確認された（7号建物・P 7写真1）。本堂跡地の大部分は墓地になっており、今回は調査できなかったが現在の本堂と同じ規模であったと考えられる。この礎石を囲んで浅い溝が走るが、これは雨落ちの施設であろうか。南面は前庭になっており、堅い地面に細かい砂利が敷かれていた部分もある。さらに参道が南に延びており、その入口は旧市川往還に面していたと思われる。参道の両側は並木になっていたらしく、木の株が並んで発見された（P 7写真3。多くは杉とみられるが同定中）。参道の本堂に近い箇所では側面に石を並べた、細かい石敷きの面も確認された（P 7写真2）。



1. 本堂跡（7号建物）の礎石



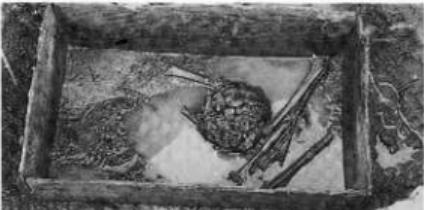
2. 参道から本堂方向を見る



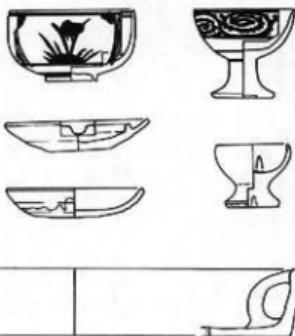
3. 参道の並木跡と石垣

【埋葬人骨】 埋葬人骨について獨協医科大学助教授茂原信生先生に鑑定をお願いしたがその要約は次のとおりである。

- 1号 熟年女性（下顎大臼歯脱落、上顎歯齒石）
- 2号 壮年以下の女性
- 3号 壮～熟年の女性？（下顎骨と椎骨のみ）
- 4号 性別不明の若い個体（錐体部のみ）
- 5号 頭蓋冠のみのため詳細不明
- 6号 成人男性の頑丈な偏平大腿骨

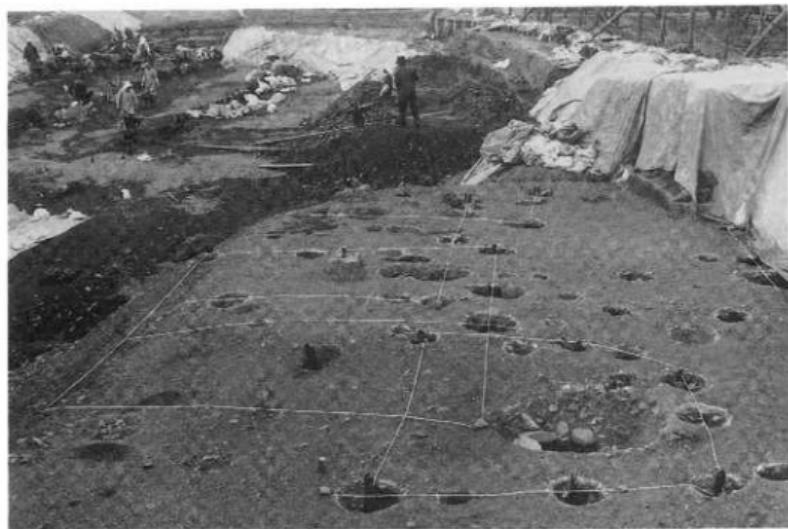


1. 埋葬された人骨



2. 遺物実測図 (1/4)





1. 第四面の建物群

【第四面の調査】 民家の礎石（3号建物）があった第二面の下約80cmに黒褐色土の面が現れ、そこから柱根を残す小穴群が発見された（写真1）。位置的には発掘区の南東隅にあたり、ちょうど3号建物の敷地真下にあたっている。柱穴の配列から少なくとも3～4棟分の建物が重複したものとみられる。柱根からは丸・四角・六角といつていくつかの種類の柱が確認できる。特に六角のものは直徑15cmあり、5寸角の面取りのある柱ともみられ相当立派なものである（写真2）。建物はさらに東側の調査区外にも延びている。また、土坑とそれを取り巻く小穴群もある（写真1の手前）。小穴中に細いながらも柱根や竹が立っていた。土坑を開んで櫛などの施設があったのであろうか。この土坑の上層からは磁器の一部や鉄釉天目茶碗および灰釉小皿破片が出土した。これら陶器は17世紀のものと見られることから、第四面の建物群は江戸時代初期のものと考えられる。この第四面は他に本堂前の一帯で確認されただけであった。

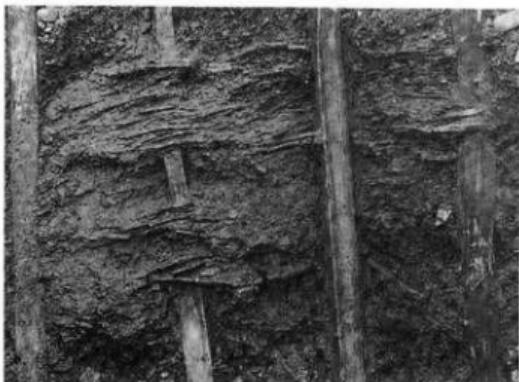


2. 柱根



1. 第五面の調査（中世）

【第五面の調査】 第二面から約2m下の砂利層中に、薄いながらも粘土面が部分的に残っていた。この部分を中心に杭が2列発見された。西側を1号杭列、東側を2号杭列とし調査を進めた（3P2図）。1号の杭は長さ1m以上のものを多く含み、中には1.84mを測るものがある。これらの杭は殆どが南西側に傾いていることから、北東方向からの水流を受けたものとみられる。杭を縦うように細枝による「しがら」が組まれている（写真2）。2号杭列では檜の板「ヘギ」を網代に編み込んでいた（P11の写真・図）。板のかわりに檜皮も用いられている。

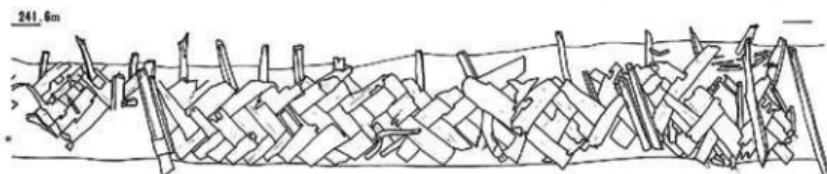


2. 1号杭列のしがら

長さ1m以下の杭が多く、網代の両側を杭で押さえ込んでいた。網代の東面がへこんだり、ヘギが剥がれている部分も多いことから最終的には東からの水流を受けたものと見られるが、東側には一部ながら水田面が残ること、網代を挟む両側の杭では西側の方が長いことなどから、本来は西側の流れから水田を守った護岸であったのかもしれない。1号と2号の同時性や流



1. 2号杭列の網代



2. 2号杭列実測図（網代）



3. 網代部分

路と生活の場とのかかわりについては検討課題である。時期については、東丹保遺跡Ⅰ区の鎌倉時代の杭列と方向性が同じであり杭の作り方も同様であることから、これらと同時期の鎌倉後半から室町前半の可能性がある。



第六面の水田跡

〔第六面の調査〕 第五面下80cm～1mに良好な黒色粘土層が見られた。これを第六面として調査を行なった。第三面以下第六面直上までは厚い砂利層で覆われており、何度も洪水が押し寄せたことが分かるが、第六面の粘土層は厚いことから、この形成時は安定した気象条件下にあったことが推測できる。この面からは水田とみられる跡が発見された。水田は一辺が約10m程の規模とみられ、少なくとも3面は確認できた。水田面には細かい砂が堆積していたが、やはり激しい洪水を受けたらしく、畦の一部が切れていたり、床面には凹凸激しい箇所も残っていた。磨滅した弥生土器片や平安時代の土師器片が出土した程度で、詳細な時期は不明。ただ隣接する大師東丹保遺跡の例では、弥生後期の水田は一辺が5m程度、鎌倉時代のものが一辺15m程度であることから、今回の水田は中世に近いものと思われる。さらに出土土器を参考にして、平安時代を遡るものではないと考えておきたい。昨年調査した東丹保遺跡Ⅰ区では、地表から約2mが弥生後期、約4mが弥生中期であったことを考えると、100m下流の今回の調査区にあっては相当砂利の堆積が厚いことが分かる。さらに下層の生活面の存在は今回確認出来なかったが、厚さ30cm程の粘土層下に砂利層があることは確かである。

調査組織

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者 新津 健（山梨県埋蔵文化財センター主査・文化財主事）
田口明子（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
作業員・整理員 秋山進也、秋山とみ、秋山正文、麻生菊江、井上時江、今津 勝、内田武子、
大木つや子、乙黒さつき、折居きく、金丸初子、黒田美江子、佐久間竹雄、齊藤利男、齊藤直江、佐藤勝子、佐野とみ江、鈴木福子、藤沢かねじ、丹沢政一、
樋口市蔵、樋口京子、樋口とよ子、樋口瑞穂子、深沢 繁、望月和子、山崎正行、横内定平、依田友弘、渡辺あけみ、渡辺俊夫
協力者・機関 井上栄一、小川和茂、井上玲治、古屋兼雄、青沼藤雄、広瀬和弘、甲西町役場、
甲西町教育委員会、甲西町文化財審議会

報告書概要

フリガナ	ミヤザワナカムライセキ		
書名	宮沢中村遺跡		
副報題	一般国道52号改築・中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第101集		
著者名	新津 健・田口明子		
発行者	山梨県教育委員会 建設省甲府工事事務所 日本道路公団東京第二建設局		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3881		
印刷所	株式会社 少国民社		
印刷・発行日	1995(平成7)年3月22日・3月30日		
宮沢中村遺跡	所在地		
	25000分の1 地名・位置・標高	小笠原	北緯35°34'86" 東経138°28'30" 標高244m
概要	主な時代	江戸時代末期・中世	
	主な遺構	江戸末の民家、寺院跡、中世の杭列(網代)・水田跡	
	主な遺物	陶磁器・土器・古鏡・木製品・土製玩具・動植物遺存体	
	特殊遺構	網代を用いた杭列(腰岸)	
	特殊遺物	木製品	
	調査期間	平成6年4月25日～平成7年1月20日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第101集

1995年3月22日 印刷

1995年3月30日 発行

宮沢中村遺跡

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根923
TEL 0552-66-3881
発行 山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局
印刷 株式会社 少国民社

